大好き！幾春別川

DAISUKI! IKUSYUNBETSU RIVER

2006(平成18年)12月24日(日曜日)（1）

VOL.16

●無料誌 ●年4回発行 ●部数:5万部 ●配布エリア:岩見沢市・三笠市・美唄市

発行元：幾春別川ニュース編集委員会
編集委員長　嵯峨　義輝

〒068-0007
岩見沢市7条東9丁目　石狩川開発建設部岩見沢河川事務所内編集委員会事務局
TEL：0126-23-9555　FAX：0126-25-1697

サケが帰ってきたよ！　サケの特別採捕見学会

木々が紅葉し、すっかり秋が深まった10月下旬、大きくなったサケたちが幾春別川に帰ってきました。

川向頭首工では「幾春別川をよくする市民の会」の主催で、岩見沢市立南小学校の児童たちが参加して、サケの特別採捕見学会が行われました。

魚道で捕獲されたサケを見て、児童たちは大騒ぎ。少し恐がりながらも、児童たちがサケの体長と体重を測りました。

「オスは上くちびるが突き出て、お腹の色が、"婚姻色"という濃いピンク色。メスには黒い線が出るんだよ」と係りの人から教えてもらっていました。

採鱗の調査では、ピンセットを使い鱗を一枚ずつはがして観察。「サケが『痛い』って言ってるよ」と、鱗をはがすのをためらう児童もいましたが、勇気を出して調査をしました。

また、生物の観察も行われ、ヤマメやカエルにドジョウ、そして水のきれいな川にしか住まないと言われているハゼの仲間、エゾハナカジカなどが入れられた水槽の周りに集まり、係りの人から説明を聞きながら興味深そうに眺めていました。

最後に、試験キットを使って幾春別川の水質を調べました。幾春別川の水質は、サケにとって住みやすい川であることを知ることができました。

児童たちはサケの生態や幾春別川について理解を深めることができたようです。

体長が65cmもあるよ！

水槽のなかで元気良く飛び跳ねるサケ

痛くないように、丁寧にね・・・

幾春別川の水は、きれいです！

来年はラベンダーが楽しみ！　フラワーライン・秋

9月26日、幾春別川狩野橋左岸で恒例の花壇の植栽と草刈が行われました。

地域住民や緑中学校の生徒たちが午後4時に集合。地域住民はラベンダーの苗の植栽とハマナスの剪定、中学生たちはこれまでに植栽してきた木の下草を刈り取りました。

北本町から毎年参加している佐藤務さん（78）は、「毎日河川敷を散歩しているので、花壇を見ると心がなごみますね。来年のラベンダーの咲くころが楽しみです」と笑います。また緑中の生徒たちも「きれいになってうれしい。普段、家でも草取りを手伝っているので大変な作業じゃないですよ」と1年生の中川侑希乃さん、近藤真依さん、中山夏希さん（左写真）。

秋のおだやかな夕日が、参加者の皆さんと幾春別川を照らしながらゆっくりと沈んでいきました。

授業が終わってから駆けつけてくれた緑中学校の生徒さんたち

虫も魚も鳥もいたよ！　旧美唄川で河川調査

汗ばむほどに暑い日となった初秋の9月8日、岩見沢市北村地域を流れる旧美唄川で河川調査が行われました。「NPO法人 山のない北村の輝き」の主催で今年で5回目。約50人が参加しました。

保育園の園児たちも参加してのネイチャーゲーム、河川の水質検査や流速の測定、川に生息する生物の調査、環境の変化に比較的強いというサリカの植樹もしました。午後からは幾春別川新水路までカヌーによる川下りを行い、川や川岸の様子を確認してきました。

さまざまな生き物が生息する旧美唄川の素晴らしさを再発見できた一日となりました。

※詳細は2ページをご覧ください。

サリカ（エゾミソハギ）の植樹

トンボをつかまえたよ！

カエルだって平気でさわれちゃう！

モクズガニの対決だよ～

足元の草花たち　PART. 3

写真家　若林　信男
（わかばやし　のぶお）

●ミゾソバ（タデ科）
●エゾミソハギ（ミソハギ科）通称サリカ

山道から畑、田、庭、道端、至るところに生えるミゾソバ。別名「牛のひたい」と呼ばれています。

一文字間違えると、とんでもない名前になります。葉の形が牛の額を真正面から見て、額から鼻にかけての形が似ているところから付いた愛称のようです。

環境の変化にも比較的強く、小さな花を咲かせます。葉のほうが大きいのであまり目立たないようですが、たくさんの花を咲かせたときには散歩道を縁取りしてくれて、とても綺麗です。

エゾミソハギは、日当たりの良い明るい場所を好み、陽をいっぱい浴びて咲いています。他の草類のなかでも一段と目立ち、存在感を主張しています。

八月の暑さの中でも、さわやかさを伝える優しい色です。

◀エゾミソハギ

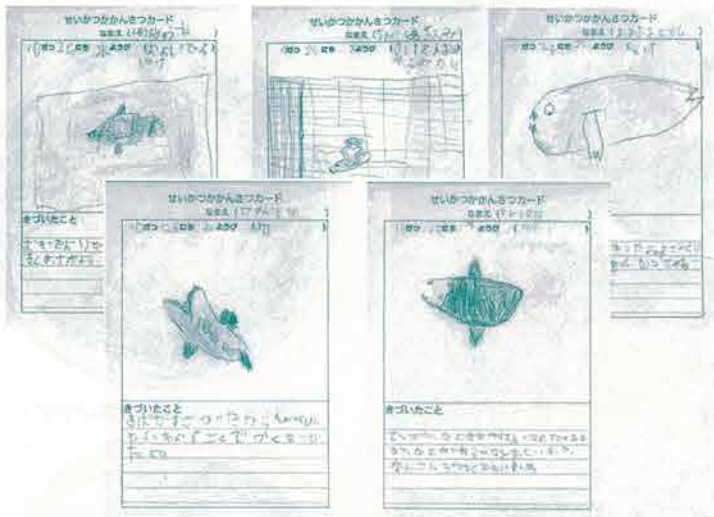
▼ミゾソバ

サケの遡上調査会 in 川向頭首工　10/25,30

三笠市立岡山小学校1・2・4年生の児童が観察!

▲係りの人が採捕したサケを持ち上げて見せてくれました。

見て見て！とれたヨ～！



見学してきた児童たちが記録した「観察カード」。いろいろな姿のサケが描かれています。

川向頭首工（岩見沢市東町）

サケを捕獲しているところを橋の上から眺めています

係りの人から説明を受けました。サケのこと、よ～くわかったかな？

児童たちが感想文を書いてくれました！

●かつた　あやか　さいしょは、本でしか見られなかったのに、10月25日にサケをみて、ちいさいなぁ～とおもいました。いくしゅんべつ川に大きなさけがいてびっくりしました。そのサケは65センチメートルもおおきかったので、すごくおおきいなぁ～とおもっていました。とてもたのしかったです。

●おの　すばる　はじめて、生きてるサケを見たとき思ったよりも大きかったので、とてもびっくりしました。

●さいとう　こはる　じっさいに、サケを見にいったとき、すごく、サケが大きかったのでとても、びっくりしました。一番心にのこったことは、水のにおいをかいで、もとの川にかえってくるのがすごいなと思いました。また、見に行きたいです。

●たねむら　ふうき　べんきょうしておどろいたこと。76センチメートルがおどろいた。あとは、においでじぶんがうまれたとこがわかるというのがおどろいた。

●かわぐち　さき　10月25日いくしゅんべつ川にサケを見に行ってはじめて分かったことはオスとメスの見わけかたや、サケがたまごをうみにくるとき、一日で来るのがすごいなと思いました。においで川にかえってくることがおどろきました。はじめて分かったことは、サケの子どもたちが海に行くのが、たったの10日間しかかからないことです。サケが大きくなるまでのことを読んだり見に行ったりして、さけのことがすごくわかりました。

●じんない　ふうた　べん強しておどろいたことは、たまごを生みに行く時、早い時で一日で川上につくと言うことがびっくりしました。一番心にのこったことは、生きているさけをみたことです。じっさいにサケを見に行って、わかったことは、小さいさけは海に行くのに10日でつくことがわかりました。

●むつむら　ほのか　いく春べつ川にいってーばん心にのこったことは、さけが65センチメートルあったのがーばん心にのこりました。2センチメートルくらいから、70センチメートルくらいになるので、すごくびっくりしました。おじさんにきいてびっくりしたことは、かえってくる時間が、早いさけで一日だと言うことと、においで分かることもびっくりしました。

●ほりうち　みのり　70センチメートルぐらいってはじめて知ったので、びっくりしました。じっさいにさけを見たとき「大きいなー」と思いました。

●さかなし　こうせい　今までおよいでいるサケしか見たことないから、体もぜんたい見えたサケを見られたので、よかったです。ありがとうございました。

第5回　旧美唄川河川調査 in 北村　9/8

▶川をめがけてダイブするカワセミ

平成18年9月8日（金）、北村中心部の近くを流れる旧美唄川「水辺の楽校」で、〝五感で川を感じよう体験調査〟というテーマを掲げ、「第5回川をはかる　川をみる　川をしる　河川調査講習会」を行いました。

午前中は、水辺の植物や昆虫を、子供たちの歓声がにぎわうなか観察しました。子供たちは見つけた分だけ、専門家からシールをもらいます。なかには、ヒマワリがちょうど実をつけていて、実を食べるのに夢中な子もいて大はしゃぎです。

次に、観察場所を川の方に移動しました。

旧美唄川に住む川魚の学習をしたり、実際に触ったりと、子供たちの興奮はピークに達したところに登場したのが、大きなモクズガニです！　これには最初とまどった子もいましたが、習うより慣れろで、両手に2匹持ち上げて決闘させる子もいたり……。先生たちは、大きなハサミにだけ注意して、子供たちと自然のふれあいを見守るのでした。

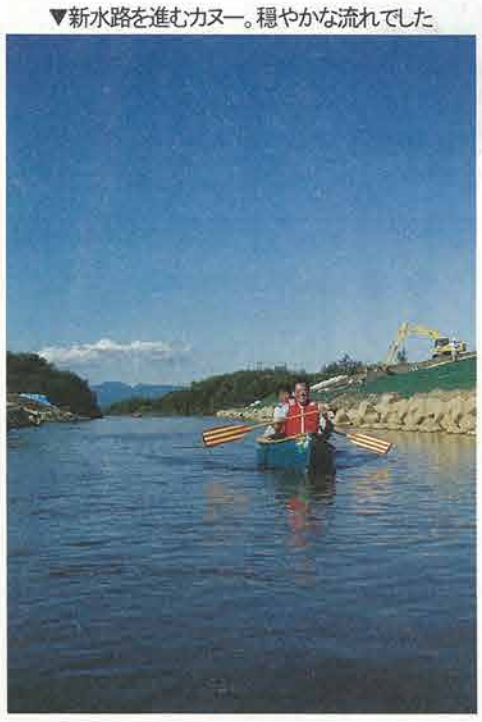
昼食は、北村環境改善センター内で、事務局のスタッフがこしらえたカレーライスをおいしく頂き、午後からの英気を養います。

午後からは、水辺の学校から

▲ネイチャーゲームに夢中になる子供たち

川に浮子を流して、流量測定の原理を学習 ▶

▼新水路を進むカヌー。穏やかな流れでした



身近な川岸には、自然がいっぱい!

午後からは、水辺の学校から今年切り替えが完了した幾春別川新水路を通り、石狩川合流付近までカヌーで川下りと相成りました。

みなさん、操縦には真剣ですが、なかなか真っ直ぐには進めません。川面から川岸を望むといろいろな発見があるものですが、カヌー初心者集団はうまく進めず、必死に汗をかいていました。

後半は、ツバメの巣などの観察、カワセミにも出会うことができ、おのおの収穫深い、旧美唄川を考える講習会となったのでした。

（文責　山のない北村の輝き　橋本　拓）

カヌーってこんなに気持ちいいの？

川とわたしの思い出

幾春別川を
よくする市民の会
赤間　由美

10歳。定山渓のせせらぎ（と言っても結構な速さ）のなか、岩がごろごろしている隙間で泳いだ。冷たく、澄んだ水の流れに体を浸して長い時間楽しんでいたけれども、流れがあるせいか、寒く感じなかった。やっぱり川は中に入らなければ……。

日高・幌尻岳への登頂、額平川の沢登り。足を取られないよう慎重に渡る。登り着いたその夜、見たこともないような、息をのむ満天の星空に出会った。

牛乳パックのボートでミニラフティング（石狩川・妹背牛町）

九州の三連水車を見に行った。なんと上流では工事中のため一滴も水がない。あきらめて帰ろうとしたそのとき、遠くから勢いよく水がやって来た。「水の頭」は丸かった。槽に水が貯まり、ゆっくりと三連水車が回り始めた。

平成15年、台風の大暴れで砂防から土砂が道をふさぎ、日勝峠は通行止めとの情報。あきらめかけたとき、開通。道路沿いを流れる沙流川は、濁流が木々をなぎ倒してどうどうと暴れまくっていた。

いつも、川との出合いや関わりは、ドラマチック。

石狩川の中州まで、子どもたちが泳いで楽しんだこと。牛乳パックのボートで、ミニラフティング。そして幾春別川でのカヌー。子どもたちに、川との良い出合いや原風景をいっぱい提供してあげたい。

20年にも及ぶ幾春別川との深い関わりは書ききれません。まさに私の最も大切なライフワーク、「大好き！幾春別川」。

雅美の体験レポート

幾春別川探検隊！

今回は、開拓当時の姿を残す

「美唄湿原」

をご紹介します！

■幾春別川の流域には、川と関係の深い様々な施設があります。FMはまなすの千葉雅美（ちばまさみ）が体を張ったレポートをしていきます。

◀入り口

①　センターから車で1分ほどで入り口に到着。端から端まで500mほど。小さな湿原ですが花のシーズンは知る人ぞ知る“花の名所”だそうです！　一般の方でもセンターで名簿に記帳すると見学することができます。

湿原内には細い木道が架けられています。一帯はびっしりとチマキザサで覆われていました。訪問したのは10月だったので残念ながら花は咲いていませんでしたが、「6月から8月にかけては、さまざまな花が楽しめますよ」と永田さん。

湿原を彩る花たち

ワタスゲ　ウメバチソウ　タテヤマリンドウ

かつて、石狩平野には広大な湿原がありましたが、農地開発に伴って湿原は徐々に消えていきました。ところが「当時の面影を残す湿原が美唄市にある」と聞き、「北海道農業研究センター美唄試験地」（美唄市開発町南）が管理する美唄湿原を見学してきました。湿原の面積は50ヘクタールほどですが、湿原らしい植生をとどめているのが2ヘクタールほどです。

今回の案・内・人

北海道農業研究センター美唄試験地

農学博士
永田（ながた）　修（おさむ）さん

泥炭層は分解されやすい有機物からできているので、適切に管理しなければ苦労して作った農地が地盤沈下を生じて使えなくなってしまうばかりでなく、有機物の分解に伴って温室効果ガスの発生という環境問題も懸念されます。当センターでは湿原、泥炭農地を対象とした研究を通じ、食糧の生産性を追及すると同時に地球環境へも配慮した農業のあり方を研究しています。

②　木道を外れて足元を見ると、ミズゴケがびっしりと生えていました。手でさわるとふわふわとして、スポンジケーキのような柔らかさでした！

排水路の断面から、「太古の木」が見えました！泥炭は1年に1mm成長するとのことです。と言うことは、排水路の高さが2m50cmとして、何と2千500年前の木ということになります！！

③一番端まで来ると排水路が通っており、その向こうには畑が広がっていました。

▼「泥炭」を切り出したものです

④「泥炭地」。初めて聞く言葉でした！　センターで「泥炭」のサンプル（左写真）を見せてもらいました。「水田や畑にするために、まず湿原の水を排水し、それから客土をする必要がありました」と永田さん。

その結果、石狩川の水位を下げて「湿原の水を排水する」ことで乾いた土地がつくられました。当時の農家の人たちには想像を絶するような苦労があったのです。そして現在の豊かな農業地域が生まれ、私たちはおいしいお米や野菜を食べることができるようになりました。

開拓時のご苦労に感謝しながら、これからも、残された貴重な湿原を大事にしなければならないと思いました！

永田さんより

「泥炭地は、有機物を蓄積し、炭素や窒素が多く含まれています。それらを分解させて大気や河川へ出してしまわないようにすることが地球環境を守る上で重要です。昔から厄介者扱いされてきた泥炭地ですが、農地開発で豊かな恵みをもたらされたことには感謝をしつつ、そこで営まれている農業が、泥炭地という貴重な環境の上で成り立っていることを認識し、保全していく意識を持つことが大切だと考えています」

わたしたちの活動紹介

川を中心にした活動を展開する仲間たちをご紹介します。

Part. 3　美唄市中村連合会　中村ワーク

■美唄市

「中村ワーク」は、平成13年6月、構成員数100戸300名で発足しました。「なかむらワーク」とは、中村地域のひとりひとりがワーク＝行動することです。

●活動の目的・・・中村の農業の発展だけではなく、豊かな自然、心やすらぐ環境や人々、取り組みなど、様々な魅力と機能を守り育むことが目的です。

●活動の概要・・・誰でも参加できるワークショップを開催して、暮らしの中での楽しみや良くしていけることなど、中村の将来などについて考え、実行します。

【これまでの主なワークの取り組み】

●風見鶏の設置（平成15年）…個性豊かな風見鶏を設置。

●先進地視察研修（平成19年）…音更の万年地区の地域活性化団体「考えてまんねん」の視察。

●カヌー製作（平成16年）…手作りカヌーを今までに5艇製作。

●カヌー祭の開催（平成13年～）…毎年8月上旬、地域内外の人々が集まり、カヌー体験や廃船を改造した屋形船に乗ったり焼肉を食べたりして、楽しい一日を過ごします。

また、平成10年に若手の主婦たちが中心になり、「えぷろん倶楽部」を結成しました。

約100年の歴史ある中村の伝統食「とりめし」を”多くの方たちに食べていただきたい”と、美唄市内のAコープびばい各店で販売しています。

毎日早朝からとりめしを製造し、その後販売店まで配達し、帰宅後、各家々の農作業に従事しています。年間の活動は約340日。毎日新しい仕事を見つけながら、会員みんなでがんばっていこうと思います。

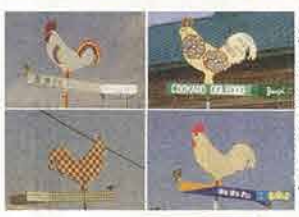


写真
（上）屋形船による菱沼（昔の石狩川）の自然観察
（中）個性豊かな風見鶏
（下）「えぷろん倶楽部」のみなさんと「とりめし」

流域の人と歴史

洪水体験談

VOL. 3

1m先が雨で見えなくなった昭和５６年の水害。ネズミも集団避難するほどのひどい水害でした！

昭和56年の水害で冠水した北村。農協前から役場方向の眺め（8月6日）

25年前、昭和５６年8月3日から6日にかけて前線と台風１２号による大雨が発生。北村役場に奉職して4年目の出来ごとで、生まれて初めての体験でした。私はその年の4月に総務課総務係に異動になったばかりでした。

雨は8月3日から5日まで、422．9mmも降り続きました。１m先が雨で見えず真っ白になり、滝のようでした（きれいでした）。

岩見沢市北村支所
建設課治水対策係
七戸　徹（しちのへ　とおる）

8月4日、北村災害対策本部を設置。本部の一員となりました。

当時はパソコンもワープロもなく電話処理や打ち合わせ報告書の作成はすべて、手書きでの処理でした。「半罫紙Ｂ５判」に、腱鞘炎になるくらい電話処理や報告書、打ち合わせ記録を書かされ、逃げたくなりました。

この日から職員は徹夜になり、施設班や救護班、炊出し班に振り分けられました。私は電話の対応が主な業務でした。掛かってくる電話は「役場は何をしているんだ、軒下まで水が入ってきた」「避難しなくても大丈夫なのか」「川の水位はどれくらいなのか」「築堤は大丈夫なのか」「道路は通れるのか」と電話の嵐で、電話恐怖症になりました……。

今なら携帯電話が普及し、どんな情報も聞けて見られる時代ですが、当時は消防車に無線が装備になっていたため、巡視の報告は民家の黒電話を借りての報告でした。

夜８時、各自治会長に情報の伝達にて避難準備の周知を行いました。しかし村民から、またも電話の嵐。「何でもないのになんで避難するんだ。村民が混乱する！」と。

自分はまだ北村のことを何も知らなかったため、先方の話を聞くのが精一杯で、正確な情報を伝えることは何も出来なかったと記憶しています。勉強不足でした。

5日、北村の市街地に大願川の無堤地区からの水が流れ込み、道道岩見沢月形線、道道奈井江北村岩見沢線が冠水し、通行止めに。栄町住民が農協や地区公民館に避難しました（ネズミも集団避難！すごい光景でした）。

空は気持の良い青空。平地は茶色一色のココア色。北村は下流域の低平地なので、水は最後に北村を通り、石狩川に流れ落ちる村なのです。大量のゴミやタイヤや麦わらの塊りが、ゆっくりゆっくりと流れていく光景は、水害特有の光景でした。

平成１８年3月２７日、市町村合併で岩見沢市となりましたが、下流域の北村地区の水害に苦しめられてきた体験を忘れることなく今後の職務に役立てていきたいと思っております。

水辺の風景

「旅の中継地　宮島沼」

撮影日　平成18年4月29日

札幌市在住　荒木　佳宏さん

マガンの故郷はロシア極東。夏は食べ物が豊富で、天敵が少ない北極圏で子育てをします。しかしそんな故郷も８月半ばには雪が降り始め、マガンは南の越冬地を目指し渡りを始めます。マガンの幼鳥は約２ケ月ちょっとで、その過酷な旅に出ます。宮島沼は旅路の途中にある重要な「渡りの中継地」なのです。

写真募集　あなたの好きな水辺の風景を写して、お送りください！

■応募内容

プリント、デジタルポジフィルムなど形態は自由です。写真のほかに、川に対する「想い」を１００文字程度にまとめてお送りください。本誌「大好き！幾春別川」に掲載させていただきます。

※1人何点でも応募できます。また、写真の返却はいたしませんので、あらかじめご了承ください。

■送付先

〒068-0007 岩見沢市7条東9丁目
石狩川開発建設部 岩見沢河川事務所内
「大好き！幾春別川」編集委員会事務局

三笠市での植栽の様子

石狩川流域一人一本３００万本植樹運動「幾春別川　緑の回廊づくり 植栽事業」

地域住民が植栽を通じて緑、そして川という財産を共有しているという気持を育むことを目的にした「幾春別川　緑の回廊づくり植栽事業」が、今年も流域の市町村で行われました。

石狩川流域46市町村長の総意により、「自然と人間の共生ー川からのまちづくり」を地域住民と推進しています。

幾春別川流域では、三笠市が10月5日に菅野橋上流で、岩見沢市は10月26日にみどり公園前緑地で、11月2日に北村地域新水路上流で行われました。

各地域の住民たちは「住みよい環境をつくろう」と協力しあって植樹をしていました。

？　川の名前

あ・れ・こ・れ

幾春別川と、その流域を流れる小さな川の名前の由来をご紹介します。

1. 幾春別川

アイヌ語のイクシウンペツ（向こう側にある・川）に、漢字をあてはめた川の名前と考えられます。

幌向川の方に住んでいたアイヌが「あっちの方の川」と呼んだことから付けられた川の名前と思われます。（参考文献「永田地名解」「山田地名解」）

2. ゴクドウ川

開拓当時、度重なる洪水で手をつけられない川、ということで地元の人が付けた。（※美唄市の郷土史家が地元の人から聞いた話で、市史などには出ていません）

3. 大願川

明治27年、岩見沢の後藤岩吉が、同じ岩見沢のこの土地に最初に入って開拓に励みましたが、明治31年の大洪水にあい、再起不能となってしまいました。

それほどの荒地でもあったため、特に植民地区画もされていなかったので入植者が一団となって、この広い区域の払い下げを願いました。そして、そのとおり許可になったところから、「大きな願いがかなった」という意味と将来への大きな希望を含めて、「大願」と呼び、これが字名になったといわれています。（参考文献「北村史　上巻286頁」参照）

4. ビバイイクシュンベツ川

チプトラシ（舟にてさかのぼる川）とされ、「北海道植民地撰定報文」では、チップトラシップ川でしたが大正4年の「沼貝村史」ではイクシュンベツ川となりました。　その後三笠市の幾春別川と区別するため、ビバイイクシュンベツ川となり、他の川と合流して第二幹川に入り、旧美唄川に流れています。

5. 産化美唄川

産化美唄川の「産化」は、同一水系となる「奔（本当の）美唄川」に対して、アイヌ語の「サンケ（物を降ろす）ビバイ川」が語源で、川とともに沢を抜けてきた物が、平地の開けた場所で陸に降ろされる所を意味していると思われます。（参考文献「美唄市地名辞典」）

■おたよりお待ちしております！■

本紙は、楽しい紙面を作るためにみなさまからのご意見や感想、また、今後取り上げてほしい記事の内容などについて、おたよりを募集しております。下記のあて先までおたよりをご郵送ください。

★送付先★

〒068-0007 岩見沢市7条東9丁目　石狩川開発建設部
岩見沢河川事務所内
「大好き！幾春別川」編集委員会事務局
※ご質問の場合も、郵送またはファックス（0126－25－1697）へお願いします。

年間行事予定

多くの方のご参加、お待ちしています！

■第５回　旧美唄川雪中植林

開催日：平成１９年２月１０日（土）
場　所：旧美唄川河川敷地
主　催：旧美唄川雪中植林実行委員会
●問い合わせ先…岩見沢市北村支所建設課治水対策係　電話：0126－56－2001